

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2004/3 第28号

「ほたるの星」という映画が 全国で上映されます

日本ホテルの会理事 井上 務

涙もろい方は、どうぞハンカチをご持参下さい。

涙を拭うハンカチが何故必要なのか？を語りたいところなのですが、ストーリーの詳細な紹介は営業妨害になるかもしれませんので控えます。(簡単なストーリーは、監督のプロフィールとともに3ページに別掲致しましたのでご覧下さい。)

さて、昨年末の12月25日、AM10時、五反田IMAGICAにて試写会がありました。とにかく、素晴らしい101分間でした。

さて、映画「ほたるの星」と私が、どんな風にして出会ったのか？を先ず、お話しさせていただきます。昨年の11月下旬、一人の女子学生が「井上さん、学芸大でホテルについての講演会があるらしいのです」と教えてくれました。彼女がキャンパス内でホテルを飼育しているクラブで活動していることを知っていた高校時代の同級生(学芸大生)が知らせてくれたとのことでした。「君は行かないの？」と聞くと「残念ながらバイトなのです

…」との答え。約束が急にキャンセルになって時間が空いていた私は一人で学芸大に向かいました。小雨の降る寒い日でしたが会場入り口では主催者の学生達が温かいお茶を用意して待っていてくれました。お陰で、冷えた掌はもちろん、心も温まりました。「随分気が利く学生さん達だな！」と感心、そして感謝しつつ会場に入りました。

講演会は、遠路山口県からお越しの小学校教員、瀧口稔先生のお話から始まりました。先生は、企業で働きながら通信教育で教員になられた方でした。最初の赴任地が防府市の小学校。校庭のよどんだ池の傍でつぶやいた「こんなところにホテルが飛んだら、きれいやろうね」の一言に「先生、ホテルを飛ばそうや！」と目を輝かせて反応した子ども達の声がドラマのスタートだったことを独特の語り口で熱く語って下さいました。会場には当時の教え子さんの一人が、今や学芸大生となって講演会場で再会！というシーンもありました。「久しぶりやね！」と演壇から語

りかける先生の声に、少し照れている男子学生の姿がそこにありました。講演会はとてもアットホームな雰囲気が進みました。

次は、悪戦苦闘の中、ホタル飼育を大成功させた瀧口先生と子ども達のお話を新聞の小さな小さな記事で知り「映画化しよう!」と思い立った監督、菅原浩志さんがお話しをして下さいました。今。ラブ・ストーリーや戦闘シーンの無い映画に投資をする方はなかなか見つからないのだそうです。しかし、戦闘シーンもラブ・ストーリーもない映画「ほたるの星」が完成。そこに至る、興味深い秘話を展開して下さいました。活字にしてはいけない「ここだけの話し」もいくつか伺いました。4月24日、昭和女子大で予定されている「日本ホタルの会談話会」ではその辺のお話しが再聴できるのでは?と期待しております、お出かけ下さい。

完成したばかりの映画の1シーン(約1分間)も拝見させて頂きました。素晴らしい作品であることを予感させてくれる1分間でした。

終了後の名刺交換で、プロデューサーの作間さんに「日本ホタルの会」の存在をアピール致しましたところ「試写会が決まりましたら連絡致します」とのお約束を頂きました。

こんな風にして私は「ほたるの星」という映画と出会いました。

いよいよの試写会には、学生2名と私の3名で出かけました。予感的中、素晴らしいストーリー、演技、映像…でした。2人の学生も感動、「涙してしまった」と教えてくれました。興奮した私達は会場ロビーで、お昼ご飯を食べるのも忘れてお互いの感想を語っていました。主題歌を歌っているアヤヤという女の子(松浦亜弥さん)が若者にはとても

人気があるという事、さらに、小説版の著者である宗田理さんについても、学生さんからいろいろレクチャーして貰いました。

映画の中で、ホタルが心配でたまらない先生が学校の至近距離に引っ越す場面があります。これは、実際に瀧口先生がとられた行動なのだそうです。ホタルを身近に観察するにはそうするしかなかった先生の熱意が伝わって来ました。そんなエピソードを含め、当事者本人(護岸工事反対の署名を実際に集めたと思われるお父さんやお母さん、つまり演技の素人さん)を登場させている場面が随所で活写され、臨場感が溢れていました。是非とも映画館で確かめてみて下さい。

さて、ある教育者が「教育とは?」の問いに対して「教育とは“明日行く”ではなく“今日行く”だ!」と語っていました。校門前に引っ越し、いつでもホタルと子ども達の所に行けるようにした瀧口先生の“今日行く”への熱い姿勢が画面から伝わってきました。

ホタル関係者はもちろん、先生方、先生を目指す学生さん、子ども達、お父さん、お母さんなどなど…多くの方に観て頂きたい素敵な映画です。5月頃から全国で上映予定。映画の舞台となった山口県では3月13日より先行ロードショーだそうです。

戦闘シーンもラブ・ストーリーもありません。親子で安心して観ることができます。

最後にもう一度、涙もろい方は、どうぞハンカチをお忘れなく。

東京国際映画祭コンペティション公式参加

菅原浩志監督作品

「ほたるの星」

【解説】

「ぼくらの七日間戦争」の菅原浩志監督が、“こころが豊かになる映画”をテーマに、「ほたるの星」を完成させました。山口県の実話を元に、新米教師と子どもたちが心を一つにして蛍を飛ばすまでを描いた感動作です。

主演は、NHK連続テレビ小説「さくら」で人気を博した小沢征悦。生徒役に菅谷梨沙子（ハロー！プロジェクト・キッズ）、脇を、役所広司、樹木希林、八名信夫、余貴美子、山本未來ら実力派が固め、主題歌を人気絶頂の松浦亜弥が歌います。

第16回東京国際映画祭コンペティション部門で世界51ヵ国363作品の中から厳選された15本に入り、公式上映されました。公開は2004年3月山口県先行ロードショーに引き続き、新宿武蔵野館ほか全国ロードショー決定。



【物語】

何度も教職試験に落ちて、やっと小学校の先生になった三輪元は、子ども達に振り回されている。学校の方針にも親達の要求にも戸惑うばかり。クラスで誰とも話さない少女・比加里とも、うまく交流が図れない。

ある日、「蛍が飛んだら綺麗だろうな」という何気ない一言に、子ども達の瞳が輝いた。その日から、元と子ども達の蛍飼育の奮闘がはじまる。比加里は蛍が飛ぶと死んだ母親に会えると信じ、一生懸命蛍を育てる。元は学校の反対を受けるが、子ども達の夢を叶えようと、辞職覚悟で蛍の飼育を続ける。蛍をきっかけに、子ども達の心も一つになっていく。

だが、蛍を飛ばす川には、護岸工事が迫っていた…。

脚本・監督 菅原浩志 (Hiroshi Sugawara)

【プロフィール】

高校卒業後、米国留学。カリフォルニア州立大学 (UCLA) 芸術学部映画・TV 学科で映画製作、演出を学ぶ。クームルーデ (優秀賞) を受賞し、81年に同大学卒業。その後、ロサンゼルスで映画の仕事を経て、帰国。88年に「ぼくらの七日間戦争」で監督デビュー。日米をベースに映画の監督・脚本・プロデュースを続ける。監督作品では俳優が多くの新人賞を受賞している。

..... 読者投稿「私とホタル」

「里」

「里川蜚」 山本一彦

私の幼いころの思い出といえば、近くを流れている立川堀に行きザリガニを取ったり水生昆虫を捕まえたりしてあたりが暗くなるまで遊んでいた記憶が多い。私にとって昆虫とはとても大切な友達だった。なぜか私は一人で遊ぶことが多くその大半は昆虫と遊ぶことが多かった。来る日も、来る日も図鑑を見てはその日つかまえた獲物と見比べて大事になでながらニヤニヤしていたことを今でも思い出す。すでにあの頃小さいけれど強く、たくましく生きている沢山の種類の昆虫達に魅せられていたのだった。それは今でも変わりなく私の中に生きつづけている。

自然とは不思議なもので、当たり前のようにあるけれどとてつもなく計算されて成り

立っているなにか偶然ではありえない必然的なものを感じる 때가たびたびある。昆虫にしろ動物にしろ生きていくための手段や子孫を残そうとするそのパワーの源には、すでにインプットされた計り知れない自然の摂理を感じる時がある。

私にとって音楽も生活の一部であり、なくてはならないものとなっている。なにかを見て体で感じそれを表現することは私にとって生きていくための力となる。だから普段から私は食欲にいろんな物に触れたり、感じたり、体験したいと願っている。特に川に入って水の流れの中に身をおき冷たさを感じ匂いを感じそしてそこに宿っている生物に触れた時私は想像を絶する生きる喜びを強く感じ

る。この年になり私にまたこのような喜びを呼び覚ましてくれたのが「里川蛍」でありまた、蛍という小さな生き物そのものだった。私が小学生だったころ身近な場所に蛍は生息していなかった、多分あの頃蛍とであっていたら今のような感動はなかったと思う。

私が本格的に里川蛍の一員として活動を始めたのは1昨年の12月頃からだった。それまで私の父をはじめ里川蛍のメンバーの方が立川堀のゴミ拾いをしたりカワニナのえさ換えをしたりしているのは、知っていたがまだ私も以前やっていた仕事が忙しく参加することができずにいた。そんな時だった。仕事にいきずまりを感じ身体にも不調をきたしていた私が何気なく息抜きにと思い蛍を見に行ったのは…

なんともいえない静けさの中、やみに舞う蛍…私は涙をこらえていた。息が詰まる、なぜかときどきと血液が心臓に流れていく。この時私の中には、ひとつの詩が浮かんでいた。この一瞬を逃すまいと私は目をこらし身体全体になにかを感じようと必死だった。絶対この思いを曲として残したい、この一瞬のせつなさや愛しさをどうにか曲として表したいと思った。この夜、私の中でなにかが変わった。

その後、愕然と浮かんでいる詩と曲がまだ一致せず本格的に作曲活動を開始できずにいた私は、父の後につづき立川堀に行ってはカワニナの餌換えを手伝ったり、里川蛍のメンバーの人と一緒にゴミ拾いをしたりしてなにかきっかけを探していた。そんな時だった、私の父をはじめ、里川蛍のメンバーの蛍を純粋に思う気持とひたむきな姿がしだいに私の心を動かし始めたのは。そして、「里」と

いう曲が完成した。

幼いころ夢中になって野山を駆けずりまわったあの日、初めて見る昆虫に触れ夜も眠れず、過ごした日々、川の向こうに日が沈みあたりが暗くなる頃なぜか心がせつなくなって一目散に父、母、姉の待つ家に飛んで帰った幼い日の思い出…

誰もがあのころ感じていたせつない何かをこの曲に感じていただければ幸いです。蛍に限らず昆虫という小さな生き物が教えてくれる命の尊さ、また、すばらしい自然環境のなかで生きていけるというすばらしさ、私は今、蛍が舞うこの町を心から愛しています。

里

作詞作曲 山本一彦

風に舞う花よ 遠く流れる雲よ
あの日母に抱かれてみた 遠い記憶を
思いえがきながら 暮れ行く空の下で
忘れかけていた記憶 たぐりよせていた
ほたるよ あの日のように
ほたるよ 愛しくゆれている

闇に舞う光が 夜の川面にゆれうごく
なつかしい古里の 遠い記憶を
忘れない今でも 目を閉じればそこに
ひたむきに生きていた あのころの私を
ほたるよ あの日のように
ほたるよ 愛しくゆれている
ほたるよ あの日のように
ほたるよ 愛しくゆれている

事務局からのお知らせ

第6回日本ホタルの会談話会

第6回談話会を開催します。今回は、巻頭でご紹介した映画「ほたるの星」の作間清子プロデューサーをお招きし、映画作成にまつわるお話を伺う予定です。映画紹介のビデオ上映も予定していますので、ぜひご来場下さい。

日 時 2004年4月24日(土) 14時から

場 所 昭和女子大学 研究館7 L04教室

テーマ 映画「ほたるの星」を語る

お問い合わせ 日本ホタルの会 tel03-3328-7379

※映画の試写はありませんので、ご承知おきください。

理事会報告

2004年2月21日に理事会が開催され、ニュースレター掲載原稿に係る注意事項を決定しました。

掲載原稿に係る注意事項

- ・原則として、本名による掲載とすること。(匿名、ペンネームは認めない)
- ・ホタル保全の立場から、ホタル生息地の詳細な記述は避けること。
- ・文中に個人名、団体名称等を入れる時は、あらかじめ執筆者が承諾を得ること。

今後の原稿掲載では、上記の注意事項を遵守していただくことになりますので、よろしくお願いします。

日本ホタルの会ホームページ開設について

当会では、3月に待望のホームページを開設しました。ぜひ、ご覧下さい。当会では、今後ともホームページを活用し、情報発信に努めてまいります。

<http://www.nihon-hotaru.com/>

ホタルのニュースレター (第28号) 2004年3月31日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 矢島 稔

156-0041 東京都世田谷区大原 2-17-6

ステーションプラザ代田橋 410

(株)オーグラム内 日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 03-3328-7379

e-mail : KYW07337@nifty.ne.jp



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

印刷 システム印刷株式会社

191-0031 東京都日野市高幡 454

TEL : 042-591-1411 FAX : 042-591-7701